

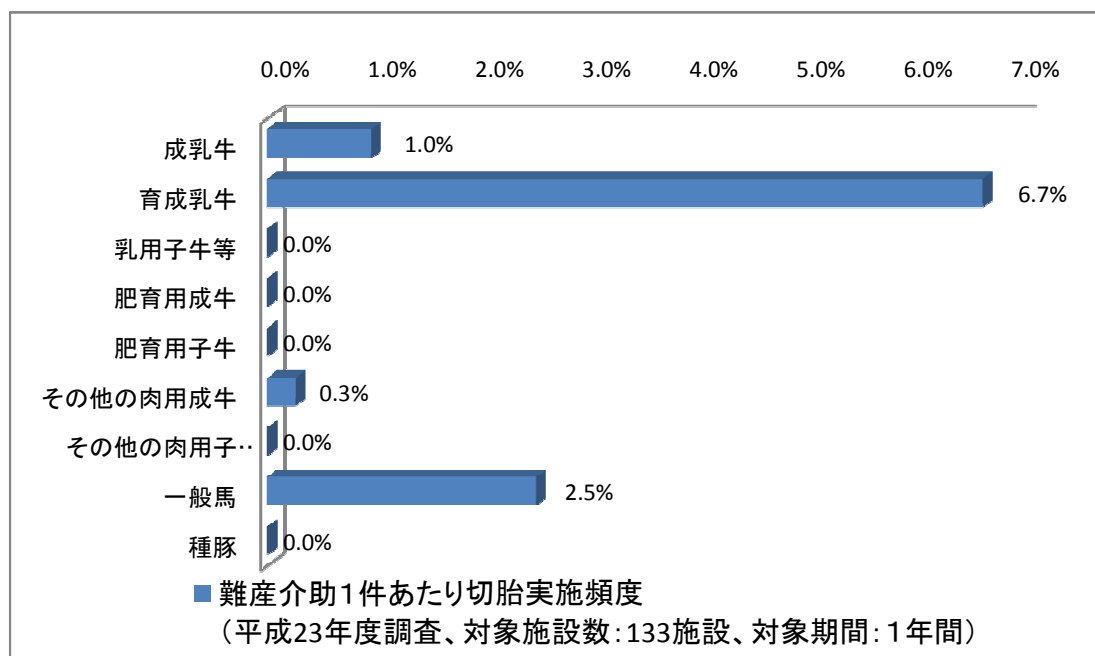
4 切胎の削除の可否に関する調査結果について

【調査事項】平成23年2月8日付け22食農審第61号食料・農業・農村政策審議会答申
「切胎」の削除の可否の判断材料とするため、切胎の実施実態を調査すること

(1) 切胎実施頻度数調査

(平成23年度調査、対象施設数：133施設、対象期間：1年間)

共済目的の種類	難産介助総件数(A)	切胎実施数(B)	難産介助1件あたり切胎実施頻度
	件	回	%
成乳牛	3,740	36	1.0
育成乳牛	45	3	6.7
乳用子牛等	0	0	—
肥育用成牛	40	0	0.0
肥育用子牛	0	0	—
その他の肉用成牛	4,296	11	0.3
その他の肉用子牛等	0	0	—
一般馬	40	1	2.5
種豚	14	0	0.0
計	8,148	51	0.6



(2) 使用物品に関する調査 (平成23年度調査)

①医療用器具機械類

品名	数量	施設数
産科チェーン	1～3	8
産科ワイヤー	1	1
切胎用ワイヤー	1	1
産科具	1	1
産科セット	1	1
載胎器	1	7
切胎器	1	1
産科フック	1	1
産鉤 (コウ)	2	2
長鋭鉤	1	1
産科鉤 (コウ)	2	1
ワイヤー式助産器	1	2
助産器	1～2	2
サンプロック		1
カウヘルパー	1	1
産科用助産器具各種		1
胎児推進器	1	1
切胎器具一式	1	3
滑車	1	2
メス	1	4
替刃メス		1
解剖刀	1	1
長柄載胎刀	1	1
産科指刀	1	5
ナタ	1	1
鋏	1	1
鉗子	4	1
線鋸	1～5	16
線鋸保持器	1組	2

②医薬品類

品名	数量	施設数
マイシリン	10ml	1
ペニシリン600万	20 c c	1
カナマイシン	20 c c	1
セデラック2%注射液	2.5ml	1
セラクター	0.5～1ml/100kg	1
塩酸プロカイ	20ml	1
ヒドロステロン静注用10ml	1	1
プラニパート	10ml～30ml	9
レジプロンC	13A	1
ポストンS	4A	1
プラネート	1	1
ブロサポ	1～4袋	9
ブロサポA		1
生食水	1L	1
消毒用アルコール	1	3
イソプロアルコール	20ml	1
ハコマ	60ml	2
オスバン	10ml	1
消毒薬		1

③医療用消耗品類

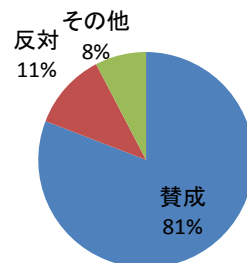
品名	数量	施設数
メス刃	1～3	2
直検手袋	2双	2
シリンジ	1～3	4
注射針	1	3
針	1～3	3
注射ポンプ	1	1
ポンプ	3	1
膣洗浄ポンプ		1
カット綿	1	1
綿花	1	3
産科ロープ		1
平打縄		1
隠刃刀	1	1

(3) 切胎を削除しないことに関する意見（平成25年度調査）

①賛成・反対の内訳

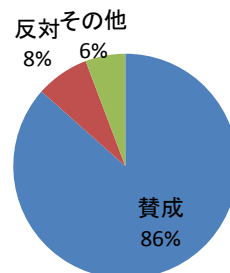
全対象施設合計	回答施設数 (複数回答含む)
賛成	169
反対	24
その他	16
合計	209

全対象施設合計



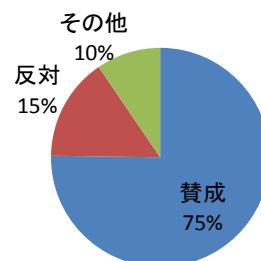
家畜診療所の回答	回答施設数 (複数回答含む)
賛成	90
反対	8
その他	6
合計	104

家畜診療所の回答



開業等診療施設の回答	回答施設数 (複数回答含む)
賛成	79
反対	16
その他	10
合計	105

開業等診療施設の回答



②賛成又は反対の理由

意見
【賛成】
種別点数を下げて良いので残すべきである。難産時の断頭及び四肢の切断は必要な場合がある。
最近の実施例はないが、今後も無いとは言い切れないため削除しない事に賛成である。
母畜にダメージの少ない方法が切胎であれば獣医師は切胎術を選択すると考えるから。
馬の難産では、いまだに切胎を実施する事もあるため。
切胎にて娩出される事もある。
帝王切開で対応しており、切胎を行うことは無いが、帝王切開の実施不可能な診療施設もあると思われるので、削除しない方が良い。
仮に胎児が子宮内で死亡していることが確認された場合などは、帝王切開よりも切胎を選択すべきと考えるため。
胎児死で両前腕屈曲頭部産道より露出等の場合、断頭による娩出が母牛に対する影響が少ないため。
切胎術は極まれにしか用いないが、帝王切開施術不適等な症例で必要になることがあり、選択肢として残さなければならない。
難易度が高いため削除しない方が良い。
難産介助で明らかな失位整復が困難な場合でも、切胎（断頭、断脚等）で娩出可能な場合がある。帝王切開となると複数術者が必要となるが切胎では補助者で対応可能。
難産介助では娩出困難な場合で帝王切開実施が不要な場合の選択肢として必要。
実際に行う件数は少ないが、切胎は通常の難産介助で必要とされる道具、手技とはまったく異なる道具、技術が必要とされるものなので、残すべき。
実施回数は少ないながら、実際に行くと「難産介助」よりも技術を要するし、使用する道具も特殊なものとなり、特に線鋸は1回の使用で使えなくなるため、「難産介助」とは分けて点数化するのが妥当と考える。
切胎により娩出可能例があり、削除することのより安易に帝王切開術を選択する可能性がある。母牛胎内での、断頭・切開により胎水・内臓の除去などを施術する場合があります。切胎の技術も熟練を必要とします。切胎は削除しないに賛成です。
難産介助にて切胎術は必要であり、獣医師の負担が大きいため。
まれであっても切胎が実施されているのであれば削除できない。
帝王切開より準備が少なく、処置時間も短いため。母体を傷つけないため負担が少ない。
難産で、胎児がすでに死亡している場合、帝王切開をせずとも胎児を摘出できる。農家負担も軽減できる。
胎児が明らかに死亡している際は、母牛を守る為に必要な処置。
全く行われない技術とはいえない。
切胎はいまだ行われている有効な処置なので残すべき。糸鋸による頭部や肢の一部のみの切胎は点数を低くした方が良い。
頻度は少ないが実施の可能性はあり。なくなると、難産介助のみの点数となり、点数的に見合わない。難産介助点数のなかでの増点の形ででも残してほしい。
難産に対応するための引き出しのひとつとして必要である。帝王切開を希望しない畜主やその乳期で終わりにしようと思っている乳牛のために。
産道にて胎仔頭部圧迫にて(頭部腫脹)整復困難な場合、頭部切除すること有り。
難産において、切胎を適用する場合は時折あり、削除の必要性を感じない。近年、初妊牛価格が高騰しており、計画的に牛の更新を行える様な経営の安定した農家は少なく、全般的に産次数が増加傾向にあり、高齢牛となり次回の妊娠を予定しない牛などで、難産時に明らかな胎子の死亡を確認した場合、帝王切開してまで死亡胎子を娩出させる必要性は低く、なるべく切胎を適用する事が妥当と考えられる為。
現行でも一部の切胎を実施することもあり、また 腐敗胎児等帝王切開ができない症例もおおく、必要。
腐敗胎児の摘出は手術中の感染の可能性が高く、帝王切開に不適応な症例であり、そのような症例では切胎が必要となる。
滅多に行われるものではないが、胎児が腐敗している場合や母牛の状態から切胎がもっとも適切であると思われる場合には実施すべき行為であり、削除の必要はないと考える。
切胎の頻度は少ないものの、技術的には難易度は高く難産とは区別すべきであり、胎子の汚染状況などから帝王切開が不適切な症例もあることから残すべきと考えます。
胎児に伴う難産の多くの場合、切胎を実施すると、その胎児の死亡、また母体の子宮、子宮頸管を損傷する原因となるので帝王切開を実施している。しかし胎児の腹水が異常に多い水腫胎（胎児はすでに死亡していることが多い）の場合、分娩時子宮頸管を腹水が邪魔をして通過できないため、産科指刀（黒澤式）で胎児の腹部を1部切胎し、腹水を排水すると容易に分娩介助できる。
頻度は少ないが、必ず必要な場合もあり、切胎が全く不必要でないのであれば、残してほしい。

死亡胎児および奇形を伴う死亡胎児の失位は、死後硬直や奇形により整復が困難であることが多く、切胎は帝王切開よりも母牛の負担が少ないと考える。
稀に切胎の必要あり。
死亡胎子等の難産時、帝王切開でなく切胎にて娩出させる可能性があるので削除しない。
切胎は産業動物獣医療にとって、重要な技術である。削除することによって安易な方向に進むことが危惧される。
帝王切開を実施するほどではないが、頭部の切断等切胎により対応が可能な場合がある。
死亡胎児の切胎は、時折適応症がある。
難産で帝王切開しなくても切胎のみで介助できることがあり残すべきである。
異常産ワクチンの普及により、奇形子牛の発生件数は減少しているのは事実です。しかし、新種ウイルスによる奇形子牛の発生、反転性裂体等の従来からの異常体型による難産は無視できない。母牛のダメージを配慮しても、帝王切開は回避できるに越したことはなく、その意味、接待術の存続は重要と考える。
難産の時どうしても胎児が娩出できずすでに胎児が死亡しているときは帝王切開を実施するよりB点は半分以上安く母牛に対しての負担が軽く、後の繁殖成績もいいから。
代替する技術点数がない。
切胎の頻度は極々少ないです。切胎するぐらいだったら、帝王切開を選択する獣医のほうが多いようです。しかし万が一と言う場合に残していたほうがよいという気がします。
南九州では、10年、あるいは20年周期で、牛の異常産は多発の傾向を示す。全てを帝王切開で対応する事は、生産県では対応は困難であり、またコスト的にも大きな負担となる事は明白。帝王切開の前提は、母子生命の維持する事を目的とする。手技として切胎を残すのは問題ないとする。今後、地球温暖化に伴い、催奇形性のあるウイルス性疾患の発生をあらゆる角度から考慮すべきと認識する。
現行どおりが適当。
アカパネ病を中心とした異常産胎児に関して、その頭部異常により難産となりやすく、頭部をクリアできれば以後の娩出はスムーズであるケースを多々経験した。よって、すでに胎児が死亡しどうしても娩出できない場合、帝王切開に至る以前に切胎を試みることは有益な難産対処法であると考え。
黒毛和牛の改良に伴い長期在胎、胎子過大が多数みられ失位等により、娩出できないことがあり、母牛の外科的ダメージを避けるために切胎を選択することがある。また、最近の発生は認めないがアカパネ病等による体型異常が発生した場合に切胎を選択する可能性あり。
異常産の発生時に適用する事がある。
かなりの労力と技術が必要なため。
頻度は少ないが実際に行われている手技のため削除する必要はない。難産介助とは技術的にかなり違いがある。
切胎をせざる得ない場合にかっぎって適応されており、重度の失位、あるいは奇形を伴う難産であるから。
難産介助の際、切胎が有効な場合がある。切胎は長時を要する事が多く、また特殊な器具を必要とする。難産介助の点数では不足と思われる。
切胎により帝王切開より迅速に胎児を摘出する可能性もあるし、相応の技術、難易度、時間、労力を要する。
今でも通常の手技として行っている。
難産介助時の切胎の頻度はそれ程多いわけではない。ただ、切胎に関わる技術や時間は通常の難産介助とはかなり異なる。この対価を、難産介助の種別に付加して薄めようとした場合、難産介助の種別点数の設定はかなり難しいのではないだろうか。逆にその頻度が少ないからこそ、難産介助とは別の種別を設定しておいたほうが、切胎および難産介助双方で、適正な種別点数が保たれるのではないかと思う。
難産で胎児が既に死亡している場合、切胎は選択肢となる。
レアケースだが、おこなう時は難産介助の点数ではカバーできない苦労を要する。
当県において切胎事例は年1～2件程度ではあるが難産介助で娩出不可。切胎で娩出可能、帝王切開までは必要のない事例あり。
現状として切胎はあるので必要である（失位胎児）。切胎は難産介助より負担が大きいので必要である（精神的にも、肉体的にも）。
実施頻度は少ないが実施する可能性がまったくないとは言えないため、削除は適切でないと考えられる。
切胎については調査の過程が不明瞭ですが、現実的にありえる行為なので削除の必要はないと思われます。なぜ削除がテーブルにのっているのでしょうか。介助における切胎は必要不可欠です。
往診現場において、担当する獣医師の現場判断によりますので残してほしい。少ない症例ではあると思いますが、切胎術を施さなくてはならない状況にあるかもしれない現状を想定して頂きたい。
必要とする症例が有る。
症例数は多くないものの切胎術を適応することがある。帝王切開術よりも母牛に負担をかけない事例もある。技術を伝承する意味からも残して欲しい。
数は少なくなっているが実施するため。
実際行われており、技術的にも高度なため、現状とおりでよいと思われる。
難しい技術ではあるが、器具の進歩（内視鏡など）により、今後も畜産先進県で実施される可能性がある。
切胎を必要とするような難産の場合、帝王切開を選択する獣医師が多いが、切胎を行う獣医師も一部いるので、従来どおり切胎は削除しないほうがよい。

症例は少なくなっているが、切胎により難産母牛が助けられる場合もあると考えられることから削除を見合わせることに賛成する。
難産介助においては、その状況に応じた対応が必要となるので切胎が必要だと判断された理由が明確な場合には給付できると考えますので削除しない。
切胎術は世界的に確立した技術であり、なぜ、日本だけが必要としないか？そのことのほうがよく理解できない。帝王切開と比較すると、処置が簡便であり、短時間に処置することができる。予後も良好なことが多く。削除してよいと考える獣医師は切胎術をよく理解していないと考える。
胎児失位で整復できない場合はすぐに帝王切開となるが、肢、頭部、体部の失位や奇形等で原因部を取り除くことにより娩出可能となる場合があるため。帝王切開による母牛への負担をかけなくて済むことは大きい。
精神的、施術の困難性。
獣医師が1名体制の診療所や手術室が無い場合には、帝王切開を行うよりも、切胎を行ったほうが、予後が良い場合も多いために、切胎は残すべきと考える。
切胎は経験と技術を必要とするが利点が多く、畜産領域においては必要な技術であると考え。切胎に変わる難産時の胎子の娩出法という、経産道以外では帝王切開となるが、帝王切開に比較して切胎による経産道による娩出は、母体だけにとどまらず術者の負担も小さく、かかる時間、労力、経費などを鑑みても利点が多く削除すべき種別ではないと考える。
切胎は難産介助により産道より娩出できない場合の選択肢としてある。通常、産道より娩出困難な場合は帝王切開を選択するが、母牛の衰弱が著しいとき、子宮の中で胎子が腐敗していて帝王切開を選択することが躊躇されるときには、切胎を選択する場合もありえる。切胎は子宮損傷や子宮内感染からの敗血症など、リスクが高いが、切胎を削除しないことに賛成である。
難産時の対応として、切胎が最も母体にやさしい治療であることがある為。
実際に実施している方もおられるので、削除すべきでない。
帝王切開術が普及した現在においてもこの術は気腫胎等において実施することがある。
異常産時等に切胎が必要なことが多々ある。帝王切開までせずすむ可能性がある。
該当症例は少ないが、必要な技術であり該当手術が発生した場合において請求点数が削除された場合混乱が生じる。
「帝王切開」「難産介助」とは別次元の処置と考えられ、別項目、別点数であってもよい。
近年切胎の頻度は少ない傾向にあり、帝王切開がほとんどであるが、切胎もする可能性もあり削除する必要は無いと考える。
切胎の適用の場合、長時間かかり、母牛に負担がかかるが、帝王切開した場合における受胎率の低下が少ないため、切胎は、必要である。
今は少なくなりましたが、アカバネ病による奇形胎子は切胎をせざるをえない場合があります。
切胎を行うことは、ごく稀で帝王切開を選択すると思われるが、胎子の一部切胎（切除）で娩出可能のこともあり。ほとんどないが必要な場合もあるので。帝王切開という方法もあるが胎子が娩出し困難である場合、切胎ということも考えられうるため。
切胎を行う可能性がある。
死胎児、特に気腫胎児、ミイラ変性胎児の摘出の場合帝王切開ではなく産道より摘出することが多く、その場合切胎術を実施する場合は現在でもあるため。
賛成ではあるが、特に理由はない。
切胎はまれに実施するので削除しない方がよい。
難産介助、子宮捻転整復、帝王切開のうち、難産介助の診療の難易度が最も幅が大きく現状の点数では、妥当でない症例が多い。切胎もなくせば、この難易度に対応する点数がさらに妥当でなくなるおそれがある。
ほとんど行われてはいないが、行う可能性はゼロではないため。
胎児死亡からある程度の時間が経過し、気腫胎、あるいは融解の始まった胎児は、帝王切開は適応とならないため、切胎術は母体の生産復帰を望める唯一の方策と考えられる。よって、切胎術は削除しない方がよいと考える。
切胎を応用する難産ケースがままある。頭位両肩甲屈折や両腕関節屈折で頭部のみ陰門より出ている（すでに胎子が死亡している）ケースでは、母体の衰弱を軽減する為にも、速やかに切胎（断頭）を行い、失位整復し、胎子娩出を行う。子宮内での切胎が想定されるケースでは、予後不良を考慮し、切胎ではなく、帝王切開術が選択される。ゆえに、切胎の削除は必要ない。
実際にまだ行われているため。
今まで通りで良いと思います。
めったにはないが実際に切胎の必要な事例を経験しているので。難産介助後に帝王切開にきりかえると母牛がほとんど助からないので。
奇形等でそのままの状態では摘出不能の場合、切胎で摘出可能ならば帝王切開を行うよりも母体への負担が軽度であると考えられるため。
必要
数年に一度、まだ切胎することがある。
今までに切胎術を実施した症例は2例程しかないが（34年間で）今後このような症例に遭遇しないとも限らない。また、削除した場合、切胎術という技術そのものが廃たれてしまう可能性も有り残念である。
切胎が必要な場合もあるから。

難産に於いて、切胎が必要不可欠の場合があり、切胎はそれなりの技術時間を有し、削除の意味がわからない。
難産介助において必要となる場合があり、削除することには反対である。
子宮内切胎の症例は、少ないと思いますが、胎児の助骨部及び腹部での膈外での娩出不可能時対応においては、合理的であるので必要と考えます。
失位奇形胎子の娩出にはもっとも有効的な技術であり、切胎を認めない場合、帝王切開の頻度が増す。
年に2～3件は切胎しないといけない症例があるのですが、（主に過大仔、産道狭窄時）なぜ、なくなるのか意味がわかりません。
削除する理由がわからない。
稀なケースであるとは思いますが、切胎をすべき時があると思います。その時の労力、時間を考えると、削除しないで欲しいです。
牛のお産は、前肢後肢の屈折、頭部の屈折が数多くあり、特に起立困難時のお産は、切胎の対応が必要とされる場合も数多くあると思います。
難産の処置の選択肢の1つとして残してほしい。
発生頻度は低いが、使用する可能性はあるので、残してほしい。
難産や胎子異常で、やむにやまれず切胎を選択する場合が有ると考える。
母体を助けるために必要不可欠。
現状まだ切胎術は施術されているのであれば削除する必要はない。
死亡している胎子の娩出には、切胎はかかせないと思います。（過大死等で娩出困難の場合、帝王切開は不必要と考えます。）
難産の度合も種々雑多であり、削除しない事を希望する。切胎術は極めて高度な技術であるが、最近帝王切開の事例が多い傾向にある、技術者は日頃の錬磨が肝要。
切胎が必要な場面は帝王切開術よりも多い。削除する理由がわからない。削除した場合切胎で摘出した場合はどの項目に当てはめるのか。※チゲーゼンの切胎器は素晴らしいが線鋸代が高い。線鋸使用の切胎についてはA点の増も検討して頂きたい。
切胎を行うことがあるため、削除しないことに賛成。
切胎は帝王切開に比べて母体のダメージが少なく、残すべき大切な技術である。未熟な分娩介助技術で安易に帝王切開へ移行するのを抑止する意味でも、方法として残すべきである。
切胎を必要とする事例はほとんどありませんが例えば過大胎児で「頭位上胎向、両前肢屈曲」で胎児が死亡していて整復困難の場合「断頭」で難産介助する場合があります。
切胎を実施されている方がいる以上残す。
難産などで分娩する親と胎児の状況により、切胎を選択せざるおえない場合が想定されるから。（親の全身症状と胎児の生死などの兼ね合い）
症例は少ないが、診療現場において切胎実施の可能性がまだ残されていることから、削除しないことに賛成する。
僅かでも適用症例あるなら残すべき。
例えば、陰部より胎子の頭だけが出て、顔が腫れ、戻すことも、出すこともできない状況の難産がたまにあります。この際は、胎子の生死にかかわらず、胎子の頭を切断します。このようなケースがあるので、切胎は残すべきと考えます。
当診療所では今のところ切胎より帝王切開を選択することしかないが、切胎の適用はあると感じている。よって切胎を削除すると技術点を取ることが出来なくなるので。
切胎の実施数は多くないが、実施することもあり、削除された場合の加点がない。
自分ではこれまで切胎をした事はないが、切胎で母体を救える場合が有るなら削除しなくてもよい。
年に一度以上は、切胎を行う為。
奇形胎仔等すでに死亡していたり、生存していないのが明確な場合、母体を助ける事を考えると帝王切開を行うより、切胎を選択する事もあり得ると思うのであった方がよい。
現行どおりが適当。
難産介助の選択肢として存続を希望します。
切胎は、過大児、奇形で現実に行われている技術であるので、削除は反対です。
全切胎は実施しないが、頭部や四肢の失位を手整復できないときに、切断すれば容易に娩出できる場合があること、帝王切開すると予後が悪い気胎の失位を切胎によって摘出できる例があることなどから有効な方法なので削除しないでほしい。
母体の救命には有効な手技と考える。
今まで切胎したことがないが、難産等で死亡胎児の娩出に使用する獣医師もいると思うから。
現在は帝王切開手術が広く普及し、難産では安易に帝王切開手術となりますが、これは母牛に大きく負担がかかります。できれば帝王切開手術をしなくて切胎により簡単に娩出できれば、短時間に済みますし、母牛にも負担がかかりません。線鋸も相当高価ですので、切胎しても難産介助だけの点数ではとても技術的に低いものとなります。それで私は、切胎は削除しないに賛成です。
理由：胎子が死亡しており、上胎向両肩甲屈折で頭部だけ外に出てきている場合、頭部を切胎することがあるので。
胎子がうまく出せれば（娩出）母牛が助かるので。

奇形胎児、胎児死亡時の処置は帝王切開よりも切胎術が母体に対して一番影響が少ない。高度の技術を必要とするが、切胎術を削除しようと言う根拠を聞きたい。
切胎は実施していないが、それ以外に母体の生存が保持できない場合には必要があると思われるので賛成です。
難産において帝王切開術での胎子摘出は可能であるが、畜産現場の多様性から考えて、帝王切開術を実施できない場合もありえる。胎子の生存をあきらめ、母体のみの救助の際、切胎術を実施する可能性は十分ありえるため、切胎術を削除しないことに賛成する。
難産にあたっては可能な限り胎児を傷つけない様にしているが、産道を通じて介助する事（娩出させること）が不可の時、直ちに帝王切開に切り替えるのは、いささか事態を大きくし過ぎるきらいがあり、母体への影響（ストレス）等を考慮すると、「切胎」は現場においては絶対的に必要な処置である。特に子宮内で胎児がすでに死亡している場合には、生存胎児に比して整復が格段に困難である事が多く、切胎する事で容易に胎児を取り出せる場合が多々あるので削除しないで頂きたい。更に私の場合個人開業であり通常全てを1人で担っており、他にスタッフが居ないので、切胎で対応できれば、大幅に負担も軽減される。
切胎は必要です。
切胎は極めて高度な技術。
切胎は行ってはいけない獣医学的技手ではなく、実際行われているのだから削除してはいけない。例えば、数年にわたって全国で実施例が無くなってから検討すればよい。
帝王切開できない死亡後時間経過のある胎仔の嫡出には、必要である。
切胎は労多くして収穫少ないので、10数年してません。しかし胎児の失位で特に奇形の場合適応になる時があるとされます。削除しても何のメリットが無かったら維持を望みます。
難産介助にて介助できない場合の処置として帝王切開のみとの判断だろうか。診療所では切胎施術の可能性があり、チゲーセン切胎器（線鋸）使用ではA種点が足りないくらい。
胎子過大や奇形による難産において胎子が死亡している場合に母体を救うために必要である。
死亡胎子で頭部のみ陰部より露出している場合は頭部を切断して胎子を生子宮にもどして両前肢を整復したほうが母牛にとって負担が少ない。
難産の診療の中では、どうしてもという場合があり、めったにはない事と思いますが点数として、残しておくべきだと思います。
気腫胎などの場合、帝王切開より切胎で摘出した方が、予後が良好。
切胎に関しては、獣医師になって一度も実施したことは無い。しかし、切胎を行ったという話は聞くし大学の講義でも習得する項目である。また、切胎を行うかどうかの判断は、農家さんの意見が一番重要である。胎児よりも母体を重視する場合もある（特に馬の場合は、顕著である）。よって切胎は削除しない方がよい。ただし点数は少し下げても良いかもしれない。
切胎の時間、神経を使う量はそうとうのものである。
その時の状態により、切胎を行えば開腹する必要もない時があるので現行通り残してもらいたい。
畜主が牽引し、胸の途中でつかえている胎児の内臓摘出や、頭部だけが陰内外に出ている際、挿送する時の頭部切断（いずれの時も胎児死亡を確認）は親牛の負担軽減に必須。
切胎の必要な症例は必ずあると考える。過去に双頭の奇形や四肢の奇形また失位によるもので切胎を行った。
難産の場合、ごくまれですが、切胎と帝王切開手術のいずれかを選択する時、母牛の負担が切胎することにより、少しでも軽くなると判断したことがあります。胎子死の確認及び帝王切開より負担が軽いと判断出来れば切胎の実施が良いと思います。よって削除には反対します。残すべきだと思います。
切胎はめったにすることでは無いが、帝王切開より家畜への負担が少ないと思われる場合や胎児が死亡、あるいは腐乱している場合は実施する場合がある。
切胎の可能性が0ではない。
切胎を行う事がある。
件数は少ないが胎児の奇形、気腫胎、母体内で死亡が確認された過大胎児などで実施する。
断頭のみが実施対象と考えられる。診療点数を下げる。
切胎が必要な場面が必ずある。特に頭部。
胎児の奇形などの場合、必要な処置であると考えから。
【反対】
最近の切胎は専ら、前肢屈折のため頭部腫大による断頭か腹水過多胎児による内臓摘出が主であり、従来よりの大がかりな切胎は実施しなくなっている。
切胎は母体に損傷を与えることが多いため、娩出困難な時は帝王切開を実施している。切胎は削除。
この三年間、切胎の事例は無く、帝王切開にて対応している。
帝王切開を実施している。
難産介助に含めればよい。
切胎を削除するのであれば、難産介助と難産介助の増点を請求すれば良い。
ほとんど適用がなくなったことと、難産介助に30分を超えた場合の増点があるので、削除してもよいと思われる。
切胎術を実施する症例は殆どない。帝王切開術で十分である。

昔何度か切胎を経験しましたが、子牛の救命、母体への負担、処置の時間がかかることなどリスクがおおく非現実的だとも思います。帝王切開を選択すべきです。
切胎は難産介助の一部であり別に点数を設ける必要が無い、そもそも現在において切胎術を実施している獣医師がいるのか疑問です。
帝王切開が普及しているので切胎は必要と思わない。動物愛護からも好ましくない。
削除が妥当である。必要に応じて帝王切開等の処置が可能と思われるため。
切胎など減多に行なわれず、帝王切開に踏み切ってしまった方が術者は楽である。
胎児過大、失位等に関しては帝王切開にて対応すべきで、切胎をすることは意味がない。帝王切開手術の進歩により母子ともに助かる確率が高い。
切胎しないから(帝王切開適応?)
臨床をやって8年近くなるが、切胎を必要としたことがない。というか、切胎をして子宮を傷つけるより、帝王切開に進んだほうが母体にもいいと思っている。
農家が埋めやすくするだけです。母牛の状態が切迫する状態が多く、帝王切開が中心です。畜種限定で適用してはどうでしょう。
切胎は削除しても良い。切胎をする様な難産には遭遇しないし、そういう場合は帝王切開を選択した方が良いと思っている。
切胎より、帝王切開が現実的であるので。
自身の家畜診療歴30年で切胎を行ったのはわずかに一例で、その一例も頸管損傷のため母体も死亡に到っている。その後殆ど帝王切開術に切り替えている。とにかく切胎は母体に対して危険性が大きすぎる。
現在、切胎による胎児の娩出することなく帝王切開が主流。
切胎は行わないから。
切胎をとまなう難産はあまりないから。
【その他の意見】
切胎する事はほとんどなく、帝王切開手術を実施しているため、どちらでも構わない。
削除するのであれば増点規定の設定を希望する。
切胎の種別を削除した場合、難産の項目で種別の増点をすべきである。(B種の時間増点分の505点に、使用器具費としてA種で+α増点)
適用例は極めて少ないと思われるが、削除すると他に適用可能な種別点数がない。削除の場合は、切胎実施にない。何かを適用するかを考える必要あり。
削除するとなると、難産介助に統合されるのであろうが、現在は30分で区切られている制度を細分化すべきである。たいしたことのない難産でも30分程度ならなんとでも操作ができる。実際には2時間かかる難産、5時間かかってしまう難産もあるのである。
以前のように切胎器を使用して行われることは少ないためB-Aを下げて良いと思う。(1500~2000)
現在切胎手術はほとんど実施していないのが現状である。難易度と時間、予後考えると帝王切開のほうが現実的である。
わからない。自分はほとんどやらない。
帝王切開で処置できる。
発生頻度にして、極めて稀な事例なのでどちらでも良い。
自身行ったことがないので正直わからない。(多数尊重)
実際に切胎は、一度も経験したことがないので賛成とも反対とも言えません。
切胎は行ったことがないのでよくわかりませんが、反転性裂体を診断した時には骨盤が出そうにもなかったので帝王切開を行いました。切胎をおこなった方が母体にかかるダメージが少ないと自信を持っている方々には、必要なのではないのでしょうか。
切胎は産道内で切胎する技術的に難しい場合と、外陰部より外で行う難しくない例があると思うが、それらが同じ点数ではないと思われる。現行点数は高いので産道内切胎に限るとし、外陰部より外での切胎は難産に追加して2000円程度で設定した方が良いと思われる。
私自身は、母体の安全を考えると切胎せずに帝王切開を行います。切胎は必要ないと思いますが、全国には切胎を行う獣医師がいれば点数は削除しないほうがいいのかもかもしれません。
年間に切胎をする機会はほとんどないのが現状であるが、まれに両側の肩甲屈折にて頭部のみ外陰部から出ており、どうしても推退出来ずに頭部切断を行い、娩出させる事がある。切胎術の代わりに断頭術(仮称)の新設や難産介助の増点規定に含めてはどうかと思われます。断頭術だけであればそんなに時間も労力もかからないため。胎児の体躯や四肢を切断することはなく、そのような場合は帝王切開を行う場合が多く、もし、切胎を行った場合は時間もかかり難儀であると思います。